

5. 開拓者の心や思いと川

開拓者たちの信仰

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展 今、そして未来へ

用語 さくいん



おついなりにんじや とよこちようおつ とかちじんじや ひろおちよう
大津稲荷神社(豊頃町大津)。1830年に始まる。十勝神社(広尾町)に次いで古い。十勝内陸に向かう開拓者たちは、ここで今後の安全と平和を祈った。



しやうこうじ ふどうどう おびひろ
(左)松光寺の不動堂(帯広市)。明治35年(1902)に晩成社が建てたお堂が残っている(場所は移された)。



おびひろじんじや
帯広神社、秋祭りのみし。

宗教と教育

明治16年(1883)、帯広に入植した晩成社の幹部たちは、キリスト教徒でした。そのため、内陸開拓が始まったころから、とくに帯広では、キリスト教の活動が始まっていました。

晩成社の渡辺カネは、移住するとすぐに開拓者の子どもやアイヌの子どもたちのための教育を始めています。キリスト教の宣教師が「教育所」をつくることもありました。

また、寺は人々が集まって学び、交流する場所ともなります。寺や説教所は、僧が先生となって子どもたちに教育する「寺子屋」や「簡易教育所」となることがよくありました(p168)
開拓初期には、宗教関係者が教育者ともなったのです。

開拓は、なれない風土や自然とのたたかいでした。開拓者たちの心は、苦しさや不安、そしてさびしさに、おしつぶされそうにもなりました。楽しみもなく、教え導いてくれるものもなかなか見つけれられません。

そんな開拓者たちの心を支え、安らぎをあたえるものとして、寺や神社などがつくられていきました。

仏教は、とくに団体入植の場合、ふるさとで信仰されていた宗派がそのまま持ちこまれました。つらい暮らしのため、祖先をまつ意識がふるさとにいた時よりも大きかったといいます。

いくつかの地方から人が集まってくる大農場では、小作者それぞれの宗派とは関係なく、農場が決めた宗派から僧を送ってもらって説教所をつくりました。

(団体入植・大農場 p166)

神社の祭りは大きな楽しみ

神社は集落や入植団体ごとに設けられることが多く、中には高さ3mほどの角材を仮に立てただけ、というものもありました。

開拓者たちの生活は、きびしい仕事に追われる毎日、遊びや楽しみがほとんどありません。

春や秋におこなわれる神社の祭りは、信仰としての意味のほかに、村をあげての娯楽の場でもありました。

村人が集まり、故郷のおどりをおどり、出し物や競馬に喜び、開拓の苦勞話に花をさかせて、一日を楽しく過ごしたといいます。



のむらじきよう せつきようじよ いげだちよう てらこや
明治31年(1898)、野村慈教が建てた説教所(池田町)。寺子屋教育もおこなわれた。(写真:『池田町懐かしのアルバム』より)

1 開拓者たちの信仰(かいたくしゃたちのしんこう): この項目では、開拓者たちを信仰が支えたことについて述べています。宗教の紹介という意味では不十分であることをご了承ください。

2 小作者(こさくしゃ): 土地を借りて耕し、土地に割り当てられた小作料をはらう農民。
3 宗教関係者が教育者(しゅうきやうかんけいしやがきやういくしや): 今でも十勝には、仏教系の学校や幼稚園、キリスト教系の幼稚園などがある。

「馬頭さん」に馬への愛情をこめて... 十勝各地にある馬頭観音

十勝は馬の産地として有名で、「馬産王国」ともいわれました。機械化が進む前までは、馬はとても大きな存在だったのです。

開拓を進める中で、田畑を起こし、作物などの荷物や木材を運び、工事で働き、草競馬で、また戦争で、馬は大活やくをしました。

農民たちにとって、馬はただの家畜以上の存在でした。馬を人が住む家の土間に飼い、家族のような思いであつかったといひます。

こうした、大切な馬への思いから、十勝の多くの場所に「馬頭観音（馬頭観世音菩薩・馬頭さん）」が置かれています。

文字をきざんだもの、石の像、木ぼりの像、色をつけた像、中には馬に乗った観音像もあります。

馬を守るため、馬が死んだ時にその霊をなぐさめ感謝するため、また、戦場へ連れて行かれた馬の活やくと無事を祈るため、など十勝の馬頭観音にはさまざまな思いがこめられているのです。

(p 196)



帯広市大正町にある「新西国三十三番観音菩薩」の中の馬頭観音像。



新西国三十三番観音菩薩の位置。帯広市大正町東4線。



川の工事でも活やくする馬。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)

もう少し細かいこと

神道の神々とカムイ

神道では、「八百万の神」といって、とてもたくさんの神がいます。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教などが「ただ一つの神」としているのと大きくちがいます。

とくに、民間信仰では、さまざまなものが信仰の対象となっています。正月になると、鏡もちを供え、門松をたて、自動車から洗たく機、台所などにも正月かざりをつけます。これはものにも靈魂がこもるのだ、という思いがあるからです。

自然についても、水神、山の神、雷神、木の神、風神などがいて、それぞれがまつられ、祈りの対象となってきました。

どこか、アイヌの人たちの「カムイ」と似たところも感じられます。

神道は、かつて、大和朝廷、そして「日本」ができていく中で、各地の人たちが信じていた神々を組みこむことでできたのだらう、と考えられています。

和人の神々も、ずっと昔はカムイのようだったのかも知れません。

(カムイ p 134)



(上)自動車につけられた正月かざり。



(右)木を切る作業の前に、「山の神」をまつる。(豊頃町)

(写真:『豊頃町史』より)

4 馬頭観音(ばとうかんのん): もともとは、観音様が変身したすがたの一つで、迷いをなくし悪を破壊(はかい)する菩薩(ぼさつ)だった。それが、時がたつうちに、馬を病やケガから守る力をもつものとして、信仰(しんこう)されるようになっていった。

5 ユダヤ教・キリスト教・イスラム教: これら3つの宗教は、呼び名はちがうが、同一の神を信仰する。ユダヤ教やキリスト教ではヤハウェ(エホバ)といい、イスラム教ではアラーと呼ぶ。